漱石『こころ』の女心

Junko Higasa

小説に倣って、以下「先生」の下宿先の母娘を「奥さん」「御嬢さん」と表現する。

奥さんは毅然とした軍人の妻である。妙な欲によって娘を良い所へ嫁がせようとするわけではなく、娘の心に沿い、かつ安定した幸せを願う者である。したがって仲人的にしっかり、キッチリと、押し付けがましくなく自然に策を講じる。

奥さんは下宿当初から堅物的な「先生」に、身寄りがなく金と学問があることを聞き、心の中で娘の聟候補とする。しかしまだ結婚の確約を得ないうちは先生と娘を二人きりの状況に置くことはできない。そこで焦らず時を窺う。すると先生が世話になっている御礼に御嬢さんに帯か反物を買ってあげたいと申し出た。これは脈がある。よい機会だ。奥さんは二人を買い物に同伴させ、娘の好みより先生の好みを反映させた品を選ばせ、二人の意識を「結婚」に接近させる。まだ男女が連れだって歩くのがはばかられた時代に、そのように同伴させたことは、世間に対して「公然の仲」と認めさせる手がかりにもなる。案の定、翌週学校で先生は、それを目撃した同級生から「いつ細君を迎えたか」と尋ねられた。『私は宅(うち)へ帰って奥さんと御嬢さんにその話をしました。奥さんは笑いました。然し定めて迷惑だろうと言って私の顔を見ました』奥さんは先生の気を引いて見せたのである。しかしそれを察した先生は逆に奥さんの意中を探る。ここに男と女の秘かな駆け引きがあり、そのことを承知している奥さんは「二、三、話はあるが急いで決めるつもりはない」と云い、先生に「どう思うか」と尋ねて探る。けれど女に臆病で人の心の誘導に警戒する先生は、奥さんの意見に同調し、他人事のように話をはぐらかす。「あんまりだわ」と笑いながら言って聞いていた御嬢さんは、先だって先生が選んでくれた反物を手に取る。そこで娘の意思は確認された。母娘は共に先生を聟候補にしている。

そこへ K が登場する。K は貧乏であるが容貌が良く頭脳も優秀だ。その観点からすれば先生よりも将来有望である。未来への可能性はある。しかも勘当されているから聟にもなれそうである。しかし母娘の本意はあくまでも先生にある。そこで奥さんは K が先生以上に堅物なのを見越して、御嬢さんと K を二人きりにして家を空ける。それは大胆な賭けだったかもしれない。そしてついに先生から娘への結婚の申し込みを受け、さらに話を掘り下げて決意が確かなことを確認し、ここで始めて娘の将来に安堵する。ついに男は女の心の駆け引きに負けた。猜疑心の強い先生は「御嬢さんへの恋」と「奥さんの思惑」の二つの女心に惑わされて、真っ直ぐな K との間にライバル心を燃やし、男の友情を裏切ったのである。しかしそれは予期せぬ不幸をもたらした。先生がはっきりと意思表示をしていれば起らなかった悲劇、奥さんと御嬢さんが正直に自分の気持ちを言えれば起らなかった悲劇。それは男心の罪か、女心の罪か定かではない。言うなれば自然の心の働きによる裁くことの出来ない人間の罪だろう。真直な K は、男と女のひとつの駆け引きに巻き込まれた悲劇の人かもしれない。

そのように人生ヴェテランの奥さんは、女であるがゆえの賢明策で、人生経験の浅い御嬢さんをバックアップする。しかし恋は不思議である。誰に教えられたわけでもないのに、御嬢さんは恋を知ったときから、「結婚」の二文字が霧の中から浮び上がったときから、男を繰る女の小細工を見事に行うのである。先生だけでは進展が遅い

話を加速させたのはKの存在である。

ある日、神田から帰るとKの部屋で御嬢さんの声がする。今まで自分と御嬢さんを二人きりにしなかった奥さんが、K と御嬢さんを二人きりにして出かけてしまった。『私は何か急用でも出来たのかと御嬢さんに聞き返しました。御嬢さんはただ笑っているのです。私はこんな時に笑う女が嫌(きらい)でした。若い女に共通な点だと云えばそれまでかも知れませんが、御嬢さんも下らない事に能く笑いたがる女でした。然し御嬢さんは私の顔色を見て、すぐ不断の表情に帰りました。急用ではないが、一寸用があって出たのだと真面目に答えました』御嬢さんは先生の嫉妬に気付いただろう。先生の気持ちの一端をつかんだ御嬢さんの駆け引きが瞬時に発揮された。K と親しくなったのは、もちろんKの人間的魅力が最前提であるが、Kが女よりも自分の道に専心する人物だという安心感の上で、先生に嫉妬を起こさせたい気持ちもあったろう。一週間程して同じ場面に遭遇した先生が一言も発しなかった日、『夕飯の時、御嬢さんは私を変な人だと云いました』それは「愛していないなら何故嫉妬するのか」という反発的問いが含まれているように思える。

そしてある夏、先生は気乗りのしないKを誘って房州へ旅に出た。そして帰ってきた時、先生は御嬢さんの変化に気付く。K より先生の世話を優先させているように見えたのだ。それは先生とKはあと1年で卒業、その後には御嬢さんの卒業も控えていたからだ。すなわち結婚を決める時期が近づいていたのである。彼女としてはここで先生に決断してもらわなければならない。しかし何の変化もなく時は過ぎ秋になった。『そのうち御嬢さんの態度がだんだん平気になって来ました。K と私が一所に宅(うち)にいる時でも、よくKの室の縁側へ来て彼の名を呼びました』卒業が迫ってくる。卒業したらもう学生でなくなる先生は下宿を出るかもしれない。時間は迫る。御嬢さんの態度は明らかに先生に冷たくなったように思われた。その状況に居ても立ってもいられず外に飛び出した先生は、K の後ろを歩く御嬢さんと出くわす。二人が偶然道の途中で会ったにせよ、この場面はきわどい。先生の心が諦めに傾くか、前進に傾くか。御嬢さんの心は揺れる。いつまで経っても煮えきらない先生に追い打ちをかけるように、彼女はその後もKの味方に傾く。まだ恋を知らなかった娘が、恋をして女に変わる。少女の心が、どこで習うこともなく幾通りもの女の小細工を重ね、別の男を頼る。

ある日、K から御嬢さんへの恋心を聞かされた先生は、ついに奥さんに御嬢さんとの結婚を願い出た。いうなれば結婚を決意させたのは当の女性ではなく、同性のライバルであった。即ち女は、自己の力を以てではなく、男同士を戦わせることによって自分の結婚を決めたのである。これは漱石の小説中の恋愛パターンである。この方法によって御嬢さんは思い通りの伴侶を得た。御嬢さんの心の中にはいつでも先生がいた。それは奥さんからすぐに結婚の承諾を得た先生が「本人に承諾をとらなくてよいか」と心配したとき『大丈夫です。本人が不承知のところへ、私があの子を遣る筈がありませんから』という答えで明らかだ。女二人の間でどのような話が交わされていたことか。

そして結婚が決まった日の夕飯時『その時御嬢さんは何時ものようにみんなと同じ食卓に並びませんでした。奥さんが催促すると、次の室で只今と答えるだけでした』『奥さんは大方極(きま)りが悪いのだろうと云って、一寸(ちょっと)私の顔を見ました』御嬢さんの極りの悪さは、嬉しさと、恥じらいと、K への気まずさである。そうして思い通りの恋を手に入れたとしても、女は男の「こころ」まで手に入れることができない。(2015.2.7)